地域共生共育プログラム「ともともPG」

１、福祉教育の現状と課題

福祉教育は、全国的に身体障害者や高齢者の困り事を疑似体験する「体験型のプログラム」が主流となっており、長崎県においても県内小中学校の69.1%が実施していることがわかりました。（令和3年に県内の小中学校及び市町社協を対象に実施した調査結果から）

このようなプログラムは、高齢者や障害者の困り事を理解する“学習”として相応の効果を上げることができる反面、体験型のプログラムだけでは受講者が困り事の解決に向けて何らかの活動を“実践”することにはつながりにくいという課題が指摘されていました。

そこで、このような課題を解決するために、全国社会福祉協議会は、体験型のプログラムに加え実践を行う「サービスラーニング」の手法を取り入れた新しい福祉教育を推奨されていますが、長崎県ではこの新しい福祉教育が浸透していないため今後の推進が求められています。

２、新たな福祉教育プログラム　地域共生共育プログラム「ともともPG」の提案と目指すもの

（１）地域共生共育プログラム「ともともPG」の実践を通して目指す将来像

行政、市町社協、教育関係者、福祉施設・事業所、当事者団体、企業等と協力しながら、体験型の福祉教育（学習）に加え、ボランティアなどの社会貢献活動等（実践）に一体的に取り組むことで、より効果的に“共に生きる”という意識を育むことを目指す新たな地域共生共育プログラム「ともともPG」を長崎県内で浸透させ、県民一人ひとりが福祉的な課題を他人事と考えずわが事と捉えその解決に向けて考え、行動する、長崎県民の“ふくしの心”が育まれる環境づくりを目指します。

<u>地域共生共育プログラム（ともともＰＧ）</u>

福祉教育（学習）とボランティアなどの社会貢献活動（実践）に一体的に取り組む「サービスラーニングの手法」を用い、より効果的に“共に生きる”という意識を育むことを目指す新たな福祉教育プログラム

学習 ＋ 実践 ➡ ともともPG

（２）地域共生共育プログラム「ともともPG」の事業実践事例　※令和６年度実施３市町社協。

※地域共生共育プログラム「ともともPG」は、特定のプログラムに限定されているわけでなく、福祉教育に取り組む人や取り組む環境（地域制、活動可能な時間）によって様々です。

①佐世保市社協　ふくしの目線で「まち探検」をしよう
＜導入（講話＋調べ学習）、体験（講話＋まち探検）、振り返り（グループワーク）、発展（ユニバーサルデザイン用品の企画・提案）＞

②雲仙市社協　私たちが生活する中での「ふくし」とは何かを考える
「支える人」と「支えられる人」やその関係性を知る
「支える」ことができる「人」とはどのような人か知り、自分にできることを考える。
＜事前学習（講話＋高齢者等の体験＋感想や気づきの共有＋ボランティアの講話）、ボランティア体験（夏休み期間に事前学習で学んだことを行動に移す）、事後学習（気づきの共有＋授業参観や文化祭での発表）＞

③長与町社協　視覚障害について知ろう
＜導入（講話）、体験（当事者と交流）、振り返り（グループに分かれて協議）、発展（学校や地域での発表）＞